



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

巻頭言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 孝次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3405

巻頭言

岐阜大学留学生センター長 堀内孝次

最近、キャンパス内で留学生達が日本語を一生懸命に話している姿を目にする一方で、意識的なのかどうか不明であるが、明らかに間違った日本語を話している日本人学生がしばしば見受けられる。思わずはらはらとさせられる。

ちなみに話し言葉について考えてみると、テレビや雑誌等に影響を受けて、新しい造語や極端な方言が強調されている。私はこの変な日本語が少々気になっている。ところで、自分の話し言葉に関しては、初対面の方と話していても、私の言葉に生まれ故郷の“関西なまり”が殆ど出なくなったせい、出身地が関西であることを誰も気がつかない。多分、私が標準語と現代風の言葉にすっかり馴染んでしまったせいだろうか。

しかし、前に一度、全く故郷意識の無い私にその方言が故郷の感覚を鮮明に蘇らせてくれた出来事があった。何時の時だったか、私事で出身地の大阪に在る病院に知人を見舞いに行ったことがあった。院内で患者をみていたその近くで数人の看護婦の話し言葉を耳にした時、その音声というカリズムというか一種の響きが温かみとなって私の心に深く“ずきん”と突き刺さった。私は思わず彼女達の方をしばらく凝視してしまったことを今でもはっきりと覚えている。自分の育った地域の方言に対して、正に自分の故郷はこの地だと感じ、自然と敏感に反応した瞬間であった。ここで言いたいことは、方言が、すなわち故郷そのものであるということだ。実際、町の様子は時代と共にすっかり変わって、今では幼いころの昔の町の面影は全く存在しないにもかかわらず、方言という言語はしっかりと私の心の中にインプットされていたのである。かつては親の勤め先の事情で転居することも多かったことから、自分を育んだ故郷の意識が時間と共に失せていっていた。その故郷への郷愁が彼女達の話し言葉から突然激しく呼び起こされたのである。それは軽い驚きであった。このことがあって以来、方言は故郷を感じさせるキーワードであることを自分なりに解釈している。

同様な思いは本学の留学生センターに訪ねて来た大阪からの訪問者の話し言葉を聞いた時も、以前と同様、大きな親しみを感じとった。方言は故郷を記憶するための一種の心理学的学習であるのかも知れない。言語学や音声学などには門外漢である私にとっても、マスメディアの普及によって年々希薄になりつつある方言の重要性が、私の頭の中で何の抵抗も無く自然と認識されている。

一般に、大学の留学生センターの紀要には日本語教育や言語関係の論文や報告などが比較的多く掲載され、学問分野としてその中で日常会話が扱われる研究事例も少なく無い。人の心の奥深くまで、浸透していく言葉の重みを今更ながら感じる今日この頃である。

2004年4月からこれまでの文部科学省主導型の大学運営から国立大学独立法人に変わって、新たな大学独自の運営がなされることとなった。従って、今回の本紀要が旧形態の最後の発刊号となる。本文をご一読頂くと同時に、近年、地域との連携なども含め、多様な活動を担ってさらに新たな発展を目指す留学生センターの活動記録を年報編でご覧頂き、これまでと同様に厳しいご批判を頂ければ幸いである。